

熊本大学教育学部フレンドシップ事業における参加学生の変容 — 地域の公民館との連携・協働を通して —

長 濱 茂 喜*

The Research on the Modifications of Students by
the Participation with “Friendship Project” at
the Department of Education in Kumamoto University

Shigeki NAGAHAMA

キーワード：フレンドシップ事業，試行錯誤，企画段階からの参画
教員としての資質・能力，社会人基礎力

1 はじめに

熊本大学教育学部フレンドシップ事業の活動に関わって3年目を迎えている。本事業は、さまざまな体験活動を子どもたちと学生がともにを行い、ふれあう中で、学生が子どもたちの気持ちや行動を理解し、実践的な指導力の基礎を身に付けることをねらいとするものである。フレンドシップ事業は、熊本市教育委員会と熊本大学教育学部が協定に基づき、連携実施している事業で、平成9年度から始まり、熊本市の公民館と連携し多様な体験事業を「意図的・計画的」に提供し続け、平成28年度で20年目を迎えている。この2年半、フレンドシップ事業の一環として行われている学生サークル、メイクフレンズの活動に顧問として関わってきた。定例会への出席や公民館での実際の活動の参観、シンポジウム等への参加を通し、学生や子どもたちにとっての本事業の意義等について考えてきたところである。

本稿は、本事業が参加学生にとってどのような資質・能力の育成に寄与しているかということについて考察を行うものである。

2 教育改革と「生きる力」

平成8年、中央教育審議会が答申した「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」は、教育界に大きな衝撃を与えることになった。

「我々はこれからの子供たちに必要となるのは、いかに社会が変化しようとも、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よ

りよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。」

答申は、「教育は、子供たちの『自分探しの旅』を扶ける営み」とし、「生きる力」を育むにあたって、「学校・家庭・地域社会の連携と家庭や地域社会における教育の充実」「子供たちの生活体験・自然体験等の機会の増加」「生きる力の育成を重視した学校教育の展開」「子供と社会全体の〔ゆとり〕の確保」の4項目を重要な視点として提起したのである。

「生きる力」の育成をめざすという教育目標の実現のためには、学校教育の役割を大きく変える必要性が生まれた。平成10年、教育課程審議会「答申」は、いわば「居場所としての学校」づくりをめざすものとなったのである。答申は、①子どもたちが伸び伸びと過ごせる場である、②自分が興味・関心があることに、じっくり取り組めるゆとりがある、③わかりやすい授業が展開され、わからないことはわからないと自然にいえ、学習でのつまづきや試行錯誤が当然のこととして受け入れられる、④子ども同士や子どもと教師の信頼関係が確立し、子どもたちが安心して力を発揮できる場であると、新しい「学校像」を提示した。ここで「ゆとり」「つまづき」「試行錯誤」という言葉の重要性に注意したい。「教え込む」のではなく、「学びを待つ」という教育のスタンスの変化がはっきりとうかがわれるからである。

平成8年の中央教育審議会答申は、今後における

* 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター

教育の在り方について、ゆとりの中で「生きる力」をはぐくむことが基本であり、「生きる力」は学校・家庭・地域社会が相互に連携しつつ、社会全体ではぐくむものとして、家庭や地域社会における教育力を充実していくことを提言し、また、教育改革プログラムにおいては、平成14年度から「完全学校週5日制」を実施することをうたい、学校教育における教育内容の厳選と軌を一にして、家庭や地域社会における子どもたちの体験活動の推進や体験活動の場の充実を図ることが課題となっていた。さらに、日本の子どもの心を豊かに育むためには、家庭や地域社会で、様々な体験活動の機会を子どもたちに「意図的」・「計画的」に提供する必要がある、平成14年度からの完全学校週5日制の実施に向けて、子どもたちの体験活動の充実を図る体制を一気に整備するため、具体的な緊急政策を提言することとなった。¹⁾

平成11年、生涯学習審議会が公表した「生活体験・自然体験が日本の子どもをはぐくむ（答申）」は、このような新しい教育システムを支える「地域の教育力」を、生活体験等の機会提供、体験プログラムの開発などの課題として提起したものである。答申は、子どもたちの体験を充実させるための地域社会の環境づくりについて、①世界や地域を能動的に変革していく人間づくりを目指す、②地域の体験を通して試行錯誤していくプロセスが子どもを育てる、③子どもたちに様々な体験の機会を意図的・計画的に提供していく、④新しい人材や組織の参加により子どもたちの体験の機会が飛躍的に拡充する、⑤子どもたちをプログラムの企画段階から参画させるような取組により自主性を引き出す、⑥新しい情報手段の活用により、子どもたちへの働きかけの可能性が広がる、という6項目を提示した。この中で、「試行錯誤」「プログラム企画段階からの参画」という言葉の重要性に注意を払いたい。その後「全国子どもプラン」として展開された各種事業は、この方向とねらいのなかで進められた。ここで考察を行うフрендシップ事業もまた、こうした観点が極めて重要である。

3 フрендシップ事業の経緯と意義

フрендシップ事業は、教員の養成段階において、学生が種々の体験活動等を通して、子どもたちとふれあい、子どもたちの気持ちや行動を理解し実践的指導力の基礎を身につけることができるような機会を設けることを狙いとして、平成9年度からスタートした事業である。当初は2～4年生を対象に「教育実践研究指導法演習」という選択科目でスタートした。現在では、この事業は、学生たちの意識の高

まりに伴い、1年生を含めた約110名による、「メイクフレンズ」というサークルとして、自主的に企画・運営されている。単位取得希望者に対しては、正規の授業としても位置づけられている。

「メイクフレンズ」は、このフрендシップ事業の一環として行われた熊本大学教育学部の授業から発展した学生主体の活動である。メイクフレンズでは、学生が活動を企画し、その活動を実践したり、そこでの体験を振り返り見直したりすることによって、「子どもを見る目」及び「子どもの考えや行動を予測した企画」のレベルを向上させることを目的としている。具体的には、熊本市内の公民館等の社会教育施設や熊本市教育委員会生涯学習課ならびに熊本県生涯学習推進センターと連携・協力しながら、子どもが参加する行事等を企画・運営・報告する活動を行っている。

ところで、教育学部の学生には、1～4年次において教育実習が行われている。実習を通して、教育という複雑で総合的な過程について理解を深め、教師に求められる知識と技術を身に付けるものである。しかし、教育実習は子どもとふれあう機会はあるが、学習指導が中心でまた期間も短く、子ども理解のための時間は十分とはいえない状況である。そのような中で、メイクフレンズの活動は、子どもたちに関わる活動を自主的に企画・運営する中で、教師を目指す学生が、子どもたちの気持ちや行動を理解し、豊かなコミュニケーション力と実践的指導力を身に付ける絶好の機会となっており、大変意義ある活動であると考ええる。

また、現代の若者、子どもには「居場所」がないとも言われる。ここで、居場所とは、萩原健次郎によれば次のようにまとめられている。²⁾

- ①居場所は「自分」という存在感とともにある。
- ②居場所は、自分と他者との相互承認という関わりにおいて生まれる。
- ③居場所は、生きられた身体としての自分が、他者・事柄・物へと相互浸透的に伸び広がっていくことで生まれる。
- ④同時にそれは、世界（他者・事柄・物）の中での自分のポジションの獲得であるとともに、人生の方向性を生む。

古賀倫嗣は、『子どもは関係の中で発達する』が、かつて『自己発達の間』であった遊びが居場所にならなくなっている現実の中で、『メディアが埋める現実空間の欠落』の問題が大きくなっていることはいうまでもない。ケータイ電話やインターネットを媒介とする『バーチャルな関係』は、個性的な社会関係を『普遍化』し、それゆえ『通分』することに

より『友人関係』が偽造される。『集団から離れる子どもたち』を生み、他方では必ず同時に『バーチャルな集団関係に依存・包摂された子どもたち』を再生産せずにはいない。』³⁾と主張している。

だからこそ、現代の子どもたちには、安心して過ごせる「居場所」が必要とされるのだと思っている。

子どもたちにとって、熊本大学教育学部が行っているメイクフレンズの活動は、体験や活動の中に、子どもたちが主体的に考え、試行錯誤しながら自ら解決策を見出していくというプロセスが含まれていて、子どもたちの「生きる力」の育成に寄与している。また、そうやって仲間とともに作り上げる喜びを感じる中に、確固たる自分の「居場所」を持つことにもなる。そのような意味で、子どもたちにとっても、メイクフレンズの活動は意義ある活動となっていると考える。

4 熊大メイクフレンズ活動の概要

熊大メイクフレンズの活動概要は、以下に述べる通りである。

(1)活動の班編成及び活動の概要

活動の班編成としては、次の3つがある。

①プランナー班…最初に子どものプランナー（企画者）を募集し、子どもと学生と一緒に月2回の会議で企画する（3回ほど）。一般参加者を呼び、プランナーと学生で企画を実行する。

②単発班…学生が約2ヶ月かけて様々な企画を作り、子どもを募集して実行する。公民館によって、泊まりがけや夜の活動をする場合もある。

③ホール班…学生が主体となって活動の企画・運営を行う。企画した活動をテーマの告知だけを行い、決まった人数を募集しない。当日集まった子どもと活動する。

(2)年度ごとの班編成と主な活動内容

年度ごとに班編成を変え活動を行っている。年度ごとの班編成は次の通りである。メイクフレンズ活動では、参加学生のことを「船員」、代表者を「船長」と呼んでいる。

①平成26年度の班編成 船員数 72人

熊本市の大江、東部、中央、託麻、五福の5つの公民館と連携し、5班構成で活動を行う。プランナー班は大江、東部、単発班は中央、託麻、ホール班は五福で活動。

②平成27年度の班編成 船員数 80人

熊本市の中央、大江、託麻、五福の4つの公民

表1 平成26年度、27年度の主な活動内

| | 主 な 活 動 内 容 |
|--------|---|
| 平成26年度 | <p>○プランナー班・・・大江、東部</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プランナー会議（大江、東部） ・「あつい！ プランナーのスペシャルサマーフェスティバル！」（大江） ・「阿蘇で遊ぼうカラフルキャンプ～大きい秋見つけた～」（大江） ・「どこでもドアで天草の緑に囲まれた山の大きな体育館でみんなで学んで協力しよう」（東部） <p>○単発班・・・中央、託麻</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「おかしの世界へようこそ～おかしでつくるすてきな思い出～」（中央） ・「きみだけのランチでおもてなし大作戦」（中央） ・「みんなで作ろう☆託麻宇宙館」（託麻） ・「君が主役だ！～はじめてのお買い物 オムライス編～」（託麻） <p>○ホール班・・・五福</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「作ろう！ 鳴らそう！ my 楽器！～僕らの五福音楽祭～」 ・「こんな町に住みたいな！～ミニチュアタウンづくり～」 |
| 平成27年度 | <p>○プランナー班・・・中央</p> <ul style="list-style-type: none"> ・プランナー会議 ・「アツイ！ 中央あそびフェスティバル」 ・「熊大ウォークラリー」「クリスマスパーティー」 <p>○単発班・・・大江、託麻</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「進め！ 大江音楽隊～つくってワクワクならしてドキドキ～」（大江） ・「ガラスの中に世界を作れ！～君だけのスノードーム～」（大江） ・「皆で作ろうピタゴランド～ピタとゴラ男の大冒険～」（託麻） ・「はじめてのお買い物～ビックなバーガーを作ろうぜ！～」（託麻） <p>○ホール班・・・五福</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「五福大運動会！～負けられない戦いがここにある～」 ・「何がでるかな？～すごろくアドベンチャー～」 |

館と連携し、4班構成で活動を行う。プランナー班は中央、単発班は大江、託麻、ホール班は五福で活動。

③平成28年度の班編成 船員数 113人

熊本市の五福、龍田、大江、中央、託麻の5つの公民館と連携し、5班構成で活動を行う。プランナー班は五福、単発班は龍田、大江、中央・託麻、ホール班は五福で活動。

平成26年度、27年度の主な活動内容は表1通りである。(一部抜粋)

なお、平成28年度は、熊本地震のため公民館が被災したり、避難所となったりしたため1学期はほとんど活動できず、9月から徐々に、「地震に遭った熊本の子どもたちを元気に!」を合い言葉に活動を始めている状況である。

上記以外にも、毎年度、合志市サマースクール阿蘇大観峰チャレンジキャンプ 熊本城わくわく体験学習等 外部依頼による活動をたくさん行っている。

(3)活動の実際

主には次のような活動形態で、計画的に活動している。筆者が顧問として出席した定例会、公民館での活動の記録を紹介したい。

①毎週水曜日に行う定例会

平成27年9月9日実施の定例会を事例として紹介する。

ア 実際に公民館等で行った活動の報告…託麻単発班 平成27年8月30日の活動

「皆でつくろうピタゴランド〜ピタ子とゴラ男の大冒険〜」の活動について、動画等を交えたプレゼンを使い代表が活動報告を行う。(10分)

イ 活動班がまとめた振り返りシートを使って、各班で協議 (20分)

＜振り返りシートの内容＞

○目的：夢中になって試行錯誤することを通して、みんなで感動を味わおう。

・目的設置の理由 ・目的を振り返って

○よかった点 ○悪かった点・改善点

○全体で話し合いたいこと

について、各班で協議。特に活動班が課題として取り上げた、全体で話し合いたいことを中心に協議を進める。この日の全体で話し合いたいことは「子ども同士をつなぐ手立てにはどのようなことがあるか」であった。その後各班の発表。

ウ 顧問からの話

振り返り会の発表を見ての感想、実際の公民館での活動を参観しての感想等を述べる。

○子どもたちが生き生きと、意欲的に活動をしていた。それは、活動前の計画、準備がしっかりなされていたからと思っている。

○子どもたちは、試行錯誤しながらも、中には、学生が想定したことを超えるようなアイデアを出して製作する子どもも見られた。

○子どもたちの製作過程においても、困っている子どもたちには具体物を示すなどしながら、適宜、助言等していた。

○はさみなどの道具の安全な使い方については十分な指導を！などの話をする

エ 諸連絡…外部依頼からの参加者の募集等

オ 班ごとに次の活動についての協議等を行う。

②公民館等で行う実際の活動

平成27年11月14日の中央プランナー班の活動を事例として紹介する。

活動内容は『冬会議2』クリスマス会についてである。参加児童8人

ア 活動前のレクリエーション…「気の合う2人」

イ 2班に分かれて会議 12月20日実施の「クリスマスパーティー」にむけての話し合いを行う。

・1班…「ケーキ作りについて」

・2班…「レクリエーションについて」

1班はプランナーの4人だけでしっかり会議をしていた。

ウ 各班で話し合ったことの発表…お互いの班で話し合ったことを共有

エ 振り返りシートへのコメントの記入…子どもの頑張りを評価

オ プランナー便りの配布と次回の活動の予告

カ 学生だけの振り返り会…本日の活動の反省を活動直後に行う。特に4年生からは、集中しない子への指導についての厳しい意見も出る。

また、公民館での実際の活動を行うために、担当者（公民館の担当者）との事前の打ち合わせ（参加子どもの人数等の確認、活動内容の打ち合わせ、諸準備物等の確認等）を何度も行っている。

それから、当日の活動に向けて、事前に学生だけで用具の準備、当日子どもたちに製作させる模型等の事前製作、模擬活動等を行い活動が充実したものになるよう努めている。

③フレンドシップ事業シンポジウム

毎年、年度末の3月に連携協力機関関係者、熊本大学教育学部の関係者、学生が一同に介しての

フレンドシップ事業シンポジウムを開催している。平成27年度（平成28年3月7日開催）のシンポジウムの概要は次の通りである。

まず、メイクフレンズ活動の実施報告が行われた。最初に、高田知佳船長が「2015（平成27）年度メイクフレンズ活動体系について」実施報告を行う。その中で、本年度は4つの公民館と提携し4班構成で活動を行ったこと、本年度の方針「視野を広げる」について、また、本年度の活動の概要等について報告を行った。その後、4つの班の代表の学生が、それぞれの班の前期、後期の活動の概要を、プレゼンを活用し報告を行った。班の報告の後には、提携している公民館の社会教育主事から指導助言を頂いた。

このシンポジウムは、熊大メイクフレンズの学生にとって、1年間の活動の集大成の場となっている。

5 活動についての考察

以下それぞれの活動に参加しての感想等を述べる。

(1)定例会に出席して

各班の活動の報告を行っているが、プレゼン力、発表力が素晴らしい。よくポイントを絞ってまとめて、分かりやすく報告している。また、一人一人の学生が真剣に参加し協議等している。学生の表情が良い。生き生きしている。なぜこんなに短い時間に、こんなにも真剣に意欲的に活動できるのだろうかと感心する。こういう熱心な姿勢が、メイクフレンズの充実した活動に繋がっているのだと認識する。先輩から後輩へ脈々と受け継がれてきた歴史と伝統がそこに垣間見える思いがする。



図1 定例会の様子

(2)実際の公民館での活動を参観して

活動が充実するよう、活動計画案が綿密に作成され、周到に準備されている。また、直接子どもと関わる学生、外から支援する学生と役割分担もきめ細かにされ、しっかりした支援体制が確立されている。さらに、安全面への配慮や製作上の手順や留意点、必要な用具の準備、使い方の指導などもしっかりとされている。その中で、子ども達が表情豊かに意欲的に活動に取り組んでいる姿、メンバーの学生のひたむきに活動に取り組む姿に感心する。また、試行錯誤しながらも、子どもたちが意欲的に活動に取り組む仕掛けもしており、レベルの高いところでの活動の充実をめざす学生の姿は印象的である。1日の活動を参観して思うことは、中身が充実した活動を行うためには、事前の準備（活動計画づくり）がとても大事であること。それをしっかりやっているからこそ、学生にとっても、子どもたちにとっても、満足感のある充実した活動ができるのだと実感したところである。



図2 プランナー会議の様子



図3 製作活動の様子

(3)フレンドシップ事業シンポジウムに参加して
シンポジウムでのメイクフレンズ活動の実施報告では、船長が活動全体の振り返りの発表を行い、その後各班ごとに代表が班活動の振り返りを発表することになっている。たくさんの活動内容からポイントを絞り、プレゼンを使い、活動の内容が聞く人に分かるように工夫されており、メイクフレンズの活動をたくさんの人に知ってもらおうという意味でも、その発表は大変効果的であると考えている。1年間の活動の足跡が見え、活動のすばらしさを広くPRする場となっていることを再認識した。その中で、まとめる力、プレゼン力、発表力等も磨かれていくのだと思っている。

6 フレンドシップ事業に育成を期待される資質・能力

平成26年4月から2年半、熊大メイクフレンズの活動に顧問として関わって、メイクフレンズ活動の意義等について考察したことを以下に述べたい。

最初に述べたが、フレンドシップ事業は、さまざまな体験活動を子どもたちと学生がともにやり、ふれあう中で学生が子どもたちの気持ちや行動を理解し、豊かなコミュニケーション力と実践的な指導力の基礎を身に付けることをねらいとしている。また、メイクフレンズは、このフレンドシップ事業の一環として行われた熊本大学教育学部の授業から発展した学生主体の活動である。メイクフレンズでは、学生が活動を企画し、そしてその活動を実践したり、そこでの体験を振り返り見直したりすることによって、「子どもを見る目」及び「子どもの考えや行動を予測した企画」のレベルを向上させることを目的としている。

まさに学生は、メイクフレンズの活動を通して、コミュニケーション力、「子どもを見る目」、教師としての実践的指導力の基礎を身に付けてきていることがうかがわれる。このことについてもう少し具体的に述べてみたい。

まず最初に、メイクフレンズのそれぞれの活動場面で身に付くであろうと思われる力について述べたい。

(1)定例会での活動を通して身に付く力

○計画を立てる力

充実した活動にするための綿密な計画案を作成

○他人の意見を聞き（傾聴力）、自分の意見を言う力（発信力）。

自分の意見をきちんと伝える、人の意見を聞く、意見の統合等

○コミュニケーションスキル（力）の体得

○他の人と協働して企画し、活動を遂行する力
○プレゼン力、発表力の向上…活動の報告を通して

(2)実際の公民館での活動を通して身に付く力

○子どもへの対応力

さまざまな子どもへの場に応じた的確な対応ができています。（活動に集中できない子どもへの対応、試行錯誤している子どもへの対応、危険な行為をしている子どもへの対応等）

○子どもたちの主体的な行動を促す力

できるだけ子どもたちが主体的に、創造的に製作に取り組むよう、学生のアドバイス等は最小限にとどめている。子どもたちが試行錯誤を重ね、いろいろと思考をめぐらして、主体的に活動し、より良い作品を創り上げようとする姿が見られた。

○評価力の向上

最後に子どもたちに活動で頑張ったところを一言ずつ書かせ、学生から一人一人の子どもたちに評価の言葉を伝えている。

身に付く力として以上のようなものが上げられる。また他にも、活動全体を通して、「計画→活動→振り返り→改善」というPDCA（マネジメント）サイクルによるマネジメントの手法が貫かれており、今学校現場でも求められているマネジメント力も確実に身に付いてきていると考える。

次に、教員に必要とされる資質・能力の面からその意義を考察したい。

平成24年8月28日に中央教育審議会から「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」の答申が出され、その中で、これからの教員に求められる資質能力として、

①教職に対する責任感、探究力、教職生活全体を通じて自主的に学び続ける力

②専門職としての高度な知識・技能

○教科や教職に関する高度な専門的な知識

○新たな学びに展開できる実践的指導力

○教科指導、生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力

③総合的な人間力（豊かな人間性や社会性、コミュニケーション力、同僚とチームで対応する力、地域や社会の多様な組織等と連携・協働できる力）の3つが挙げられている。

メイクフレンズの活動は、特に③の総合的な人間力の向上に寄与するものであると考えている。具体的に述べると、

○豊かな人間性や社会性…学生、子ども、公民館の担当者等との関わりで磨かれるもの

○コミュニケーション力…対学生，対子ども，対公民館の担当者 等

○同僚とチームで対応する力…活動計画の作成，実際の活動

○地域等と連携・協働できる力…公民館と連携しての活動への参加

メイクフレンズの活動は，正に，今求められている教員の資質・能力の一部を身に付けさせる役割を担っているものと考えている。

最後に，現在，大学等高等教育に求められている「社会人基礎力」育成の面から考察してみたい。

平成18年2月に「社会人基礎力に関する研究会」（経済産業省）から「職場や社会の中で多様な人と共に仕事をしていくために必要な基礎的な力」として「社会人基礎力」の概念が発表されている。そこに示された3つの力と12の要素は表2の通りである。

表2 「社会人基礎力」の3つの力と12の要素

| 3つの力 | 12の要素 | | | |
|------------------|------------|--------------------|-----|-------|
| ①前に踏み出す力（アクション） | 主体性 | 働きかけ力 | 実行力 | |
| ②考え抜く力（シンキング） | 課題発見力 | 計画力 | 創造力 | |
| ③チームで働く力（チームワーク） | 発信力 規律性 | 傾聴力 ストレスコントロール力 | 柔軟性 | 状況把握力 |

大学等においては，ここで提唱された「社会人基礎力」を大学教育の中で育成しようという取り組みが行われてきたところである。また，平成22年に出された「社会人基礎力育成の手引き」（経済産業省編）の中には，「また，クラブやサークル，あるいはボランティアなどの課外活動として，大学はどのような活動を提供できているのか，できる可能性があるのか，さらに課外活動の中で4年間を通してどのように学生の『社会人基礎力』が育成されるのかを把握し，その上で何を提供するかを検討していくことも重要でしょう。」⁴⁾と課外活動での取り組みも提案されている。

正にメイクフレンズの活動は，①前に踏み出す力（アクション），②考え抜く力（シンキング），③チームで働く力（チームワーク）を育成する場面を備えており，この「社会人基礎力」を育成するための格好の課外活動の場ではないかと考えている。

7 学生アンケート調査結果の分析

学生へのアンケート調査結果の分析を通してメイクフレンズ活動の意義について考察したい。

メイクフレンズの学生に対して，①「メイクフレンズに加入した動機」，②「メイクフレンズの活動を通してやりがいを感じる場所」，③「メイクフレンズの活動を通して苦労している（する）点」，④「メ

イクフレンズの活動を通してどのような力が身に付いたか」，の4項目についてのアンケートを実施した。

（回答者 1年生18人 2年生16人 3年生8人 4年生14人 計56人）

その結果をもとに，メイクフレンズの活動の意義等について考察してみたい。

(1)「メイクフレンズに加入した動機」，主なものとして

○いろんな個性を持つ子どもとふれあうことが楽しい。また，将来先生になったとき，経験が生かせると思ったから。（1年生）

○将来教員になるために，少しでも多く子どもと関わる機会を設けたかったから。（2年生）

○教師になる前に子どもたちと関わることでできる機会を多く持つため。（3年生）

○大学生活では，子どもと関わる機会が実習くらいになるので，メイクフレンズに入ることによって子どもと関わるができるから。

（4年生）

というものがあげられる。1～4年生とも，将来教員になったときに，メイクフレンズでの子どもとの関わりは役に立つ，だから加入したという学生が多く見られた。教育学部の学生として，将来を見据えて加入している様子がうかがえる。

(2)「メイクフレンズの活動を通してやりがいを感じる場所」，主なものとして

○子ども達を喜ばせる，楽しませることを目標に，仲間と活動を仕上げていくところ。

（1年生）

○自分の考えがレベルアップしたとき。（2年生）

○活動で目的を達成できたと思うとき（見たかった子どもの姿が見られたとき）（2年生）

○話し合いを通していろいろな人の意見が聞けて，プレなどを繰り返して改善しながら活動をし，実際の子どもの活動の中で反省が生かされていたとき。（2年生）

○他者の多様な意見を知ることができること。（3年生）

○ただ子どもと遊ぶだけでなく，活動を1から企画し，実践，振り返りをする中で，次に生かせる経験が増えること。（3年生）

○子どもと関わる中で楽しいと思うことばかりではなく，なかなか反応を示してくれない子，走り回ってついてきてくれない子と様々な子どもがいます。そのような子どもたちとかかわる中で，子どもたちに良い方向への変化が見られたときにやりがいを感じる。（3年生）

○学生や先生方，地域の方などとの様々なつな

がりが生まれること。(4年生)

○自分自身の成長に活動を通して気づけること。(4年生)

○学生同士で話し合いを重ね、「企画・実践・振り返り」を通して、子ども理解を深めることができること。(4年生)

というものがあげられる。計画を作り上げる段階、活動する段階において、それぞれの学生が子どもの変化や成長にやりがいを感じていることが分かる。また、学生同士、先生や地域の方々とのつながりの中で、自分自身の成長に気づくということは、やりがいとともに自信や喜びへとつながっているものと考ええる。

(3)「メイクフレンズの活動を通して苦勞している(する)点」, 主なものとして

○いろんな子がいて、一人一人にあった支援を考える点。(1年生)

○メイクフレンズの話し合いで、答えのない困難にぶち当たったとき。(1年生)

○企画を考えるとき、また、本番やプレを終えた後の振り返り会などで、“子どもの立場”になって考えるのが難しい。子どもの思いも寄らない行動が、本番で良い方向にも悪い方向にも進むこと。(1年生)

○子どもへの声かけの仕方が分からず困った。(1年生)

○どんなに話し込んでも、本番になると、やはり課題が出てくること。(1年生)

○三役(班)になったときに、話し合いに来れる人が固定化し、話し合ったことの内容、結果を共有するのが大変だった。(2年生)

○企画の話し合いの時に、自分の意見を持つのが難しかった。(2年生)

○幅広い視点で考えること。(2年生)

○班のみんなが同じやる気とは限らないので、班の意識にばらつきが出てしまう点。(2年生)

○20人もいる班の中で意見が一致することはほとんどなく、両方の意見を踏まえながら一つにまとめることが私にとって難しかったです。(2年生)

○子どもが後ろ向きな気持ちの時(モチベーションが低かったり…)の対応など。(3年生)

○班長として、話し合いの計画を立て進めていくのが難しかった。(3年生)

○メイクフレンズの活動は、協力してくださる公民館や、子どもたち、親御さんたち、様々な支援してくださる方々に少なくない責任が生ま

れてくるので、意義ある活動にするためにはどうしたらいいのか、毎回苦勞して考えている。(4年生)

○学生間での話し合いの際に、意見が対立したり、様々な手立で支援が考えられたりする。いかに、目的に合っているか、建設的に話し合うことができるか、という点で苦勞する。(4年生)

○各活動で様々な子どもに出会うが、どういう支援、対応がその子どもに合っているかを考えるときに、葛藤したり苦勞したりする。

(4年生)

子どもを意欲的に活動させるための支援のあり方を求めて葛藤している中に、子どもを理解しようと努力する姿がうかがえる。また、学生間の話し合いにおいても、目的達成のため、ゼロの段階から創り上げることの難しさや、周りの人々との協働・協調に心を砕いている姿が見受けられる。そのような困難を乗り越えて、目標を達成していくところに人間としての成長があるものと考えている。

(4)「メイクフレンズの活動を通してどのような力が身に付いたか」については、「社会人基礎力」の12の要素として示されているものから8つを取り上げ、どのような力が付いたかを質問した。その結果は表3の通りである。回答56人(複数回答可)回答者数は56人と少ないが、学年別の傾向を知るために細分化した表とした。

この結果を見ると、「課題発見力」、「計画力」、「傾聴力」が身に付いたと答えた学生が60%を超えており、一連の活動の中で、そのような力を確実に身に付けてきていることがうかがわれる。反面、「発信力」については、33.9%と全体の中では低い数値になっており、自分の意見をきちんと持ってみんなの前で発信することの難しさもうかがわれる。他にも、「協調性、リーダーシップなども身に付いたと思う。」、「礼節(敬語、最低限の社会のマナー等)も身に付いたと思う。」、「子どもたちの安全をよく考えるようになったので、危機管理能力が身に付いたと思う。」というような回答もあり、上記以外にもいろいろな力を身に付けている様子もうかがわれる。ここにあげたそれぞれの力は、計画→活動→振り返り→改善というメイクフレンズ活動の一連の流れの中で、一人一人の学生が真剣に活動することによって身に付けてきたものと思っている。また、「ここにあげられている力は、教師に必要な資質だと考える。メイクフレンズの活動ではその全てが入る、と3年間の活動をしてきて実感する。」と回答した学生もいて、将来を見据えて、必要な力を身に付けるべ

表3 身についた力についてのアンケート結果

| | 1 年生 | 2 年生 | 3 年生 | 4 年生 | 合計 | % |
|--------|------|------|------|------|------|-------|
| 回答者数 | 18 人 | 16 人 | 8 人 | 14 人 | 56 人 | |
| ①主体性 | 8 人 | 9 人 | 5 人 | 9 人 | 31 人 | 55.4% |
| ②実行力 | 8 人 | 8 人 | 6 人 | 7 人 | 29 人 | 51.8% |
| ③課題発見力 | 10 人 | 11 人 | 6 人 | 7 人 | 34 人 | 60.7% |
| ④計画力 | 9 人 | 9 人 | 5 人 | 12 人 | 35 人 | 62.5% |
| ⑤創造力 | 9 人 | 7 人 | 3 人 | 8 人 | 27 人 | 48.2% |
| ⑥発信力 | 6 人 | 4 人 | 4 人 | 5 人 | 19 人 | 33.9% |
| ⑦傾聴力 | 8 人 | 10 人 | 7 人 | 9 人 | 34 人 | 60.7% |
| ⑧柔軟性 | 4 人 | 8 人 | 5 人 | 10 人 | 27 人 | 48.2% |

く活動を頑張っている学生の姿もうかがわれる。そのようなことから、メイクフレンズの活動は、「教師として」のみならず「社会人として」の必要な基礎力を培うのに大変効果的であると考えている。

8 おわりに

これまで、2年半、熊大メイクフレンズの顧問として、メイクフレンズの活動に関わってきた。私が関わったのは、メイクフレンズ活動の全体像から見れば、ほんの一部でしかないと考えている。しかし、その限られた中での活動への関わりではあったが、関われば関わるほど、学生の熱心な活動の様子を知ることができ、感心することしきりである。

定例会については月一度の参加であるが、夜6時という時刻に、熱心に話し合いに参加している姿を見ると、どこからこの意欲とエネルギーがでてくるのだろうと思わずにはいられなかった。一人も不熱心な学生はいない。一人一人の学生が、真剣な表情で、振り返りを行い、熱心に協議等行っている。もちろんその中には、他の学生との意見等の違いで葛藤する場面も多々あるのだろうが、そういうものを感じさせないくらい熱心に協議している。その姿が素晴らしい。

メイクフレンズのその時々懇親会や送別会に参加して学生のいろいろな考えを聞くこともできた。特に、年度末の4年生の送別会は、かなり厳粛な雰囲気漂う場でもある。4年生一人一人が4年間の活動を振り返っての思いを語る時間があるのだが、その中で、多くの学生が、活動する中で意見の衝突

や人間関係などの葛藤やいろいろな悩みを抱え、時には活動を辞めたいとまで思い詰めながらも、それらの困難を乗り越えて活動を続けてきたことを語っている。普段は見えない、また見ることでできない学生の心の奥底が見えるひとときである。それぞれが4年生まで簡単に活動を続けてはいない。いろいろな困難を乗り越えてこの場に立っている。そのことが人間としての大きな成長につながってきているのだろうと考える。送別会はまさにメイクフレンズの「卒業式」なのである。

また、公民館に足を運び、実際の活動を参観すると、そこでしか見れない、学生の緻密な計画のもとでの活動実践、子どもたちへの的確な指導・助言、子どもたちの主体的な活動、創意工夫を促すため、できるだけ口を出さず必要最低限の発言にとどめ、子どもたちの活動を見守ろうとする姿、学生たちのすばらしい姿をそこに見ることができる。関われば関わるほど、メイクフレンズの活動の深さを感じるところである。もしかすると現役の若手教師より、子どもへの関わり方が上かも知れないと感じることもある。今の学校現場ではいろいろな課題が山積する中、教職員はその対応に苦勞しているのが実状である。「試行錯誤」「プログラム企画段階からの参画」をキーワードとするメイクフレンズ活動の経験を繰り返し積んでいくことが、教員になったときに、そのような課題に対しても適切に対応できる力に結びついて行くのだろうと思っている。メイクフレンズの学生については、この活動を続け、教員に求められている資質・能力、社会人として求められている社会人基礎力をしっかり高め、将来活躍できる人材に育ってくれることを心から願っている。

引用文献

- 1) 生涯学習審議会「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ－青少年の『生きる力』をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について－（答申）」、1999年
- 2) 田中治彦（編著）『子ども・若者の居場所の構想』、学陽書房、2001年、63頁。
- 3) 古賀倫嗣「子ども・若者の居場所の構想」（書評）、日本生活体験学習学会誌、2002年
- 4) 経済産業省（編）『社会人基礎力育成の手引き－日本の将来を託す若者を育てるために』、朝日新聞出版社、2010年、402頁。

参考文献

- 大迫靖雄・木原信市・吉田道雄・中山玄三「熊本大学における『フレンドシップ事業』の実践」、熊本大学教育実践研究第16号、1999年
- 大迫靖雄・木原信市・吉田道雄・中山玄三「熊本大学における『フレンドシップ事業』の実践（第2報）」、熊本大学教育実践研究第17号、2000年
- 大迫靖雄・芥川允元・吉田道雄・中山玄三「熊本大学における『フレンドシップ事業』の実践（第3報）」、熊本大学教育実践研究第18号、2001年

- 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター「2014（平成26）年度 熊本大学教育学部フレンドシップ事業実施・成果報告書」、2015年
- 熊本大学教育学部附属教育実践総合センター「2015（平成27）年度 熊本大学教育学部フレンドシップ事業実施・成果報告書」、2016年
- 経済産業省（編）『社会人基礎力育成の手引き－日本の将来を託す若者を育てるために』、朝日新聞出版社、2010年
- 古賀倫嗣「子ども・若者の居場所の構想」（書評）、日本生活体験学習学会誌、2002年
- 生涯学習審議会「生活体験・自然体験が日本の子どもの心をはぐくむ－青少年の『生きる力』をはぐくむ地域社会の環境の充実方策について－（答申）」、1999年
- 田中治彦（編著）『子ども・若者の居場所の構想』、学陽書房、2001年
- 田中治彦・萩原健次郎（編著）『若者の居場所と参加』、東洋館出版社、2012年
- 中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（答申）」、1996年
- 中央教育審議会「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」、2012年
- 長澤成次（編）『社会教育』、学文社、2010年
- 南里悦史（著）『改訂子どもの生活体験と学・社連携』、光生館、2001年